膝前十字靱帯（ACL）再建術後における深部静脈血栓症（DVT）

聖隷浜松病院　整形外科・スポーツ外傷外科
船越雄誠　　小林良充

深部静脈血栓症（以下 DVT）はよく知られた病態であるが、関節鏡視下手術においては稀であり、他の下肢手術に比べるとあまり注目されていない。日本整形外科学会による DVT 予防ガイドラインでは「中リスク」に相当するとされている。弾性ストッキングは広く DVT 予防に使用されている。膝前十字靱帯（以下 ACL）再建術後に生じる DVT の発生頻度を明らかにしその予防法を検討する目的で調査した。

【対象と方法】

2007年 7 月から2008年11月までに当院で施行した ACL 再建術136例、男性84例・女性52例を対象とした。調査前半の54例は弾性ストッキングを使用しなかったグループⅠとし、調査後半の術中・術後弾性ストッキングを装着し、術後輸液を追加した82例をグループⅡとした。手術は全身麻酔下で行い、全例でターニケットを使用した。DVT の検索は超音波検査で術後 3 - 5 日目に行った。下腿の腫脹や痛みなどの症状のあるときにはその都度検査した。DVT を生じた症例では血栓素因、プロテイン C、プロテイン S、アンチトロンビンⅢを調べた。

【結　　果】

グループⅠでは54例中 7 例（13%）に DVT を認めた。そのうち 2 例が有症状で下腿の腫脹や痛みを訴えた。グループⅡでは82例中 4 例（4.9%）に DVT を認めた。それらは全て無症候性であった。全ての症例で、膝窩静脈より近位に DVT を認めなかった。DVT を発症した症例において血栓素因を認めなかった。DVT を発症した症例の平均年齢はグループ Ⅰ,Ⅱとも高い傾向にあったが、有意差は認めなかった。DVT を発症した群とそうでない群で BMI には有意差を認めなかった。

【まとめ】

今回の調査では下肢全体で8.1%の DVT が見つかったが、近位型 DVT は認めなかった。幅広い年齢層、BMI 層において DVT が発生していた。術中・術後の弾性ストッキングの使用、術後輸液の追加により発生頻度を減らすことができた。